

2024年5月19日

主題「教会が大切にすべきこと」

ルカの福音書 24:45-49

## 序

ペンテコステおめでとうございます。イースター、クリスマス、そしてペンテコステ。この3つは教会にとって中心と言える大切なものです。イースターとクリスマスはおめでとうございます、と言い合いますが、ペンテコステおめでとう！とは、あまり言い慣れないな、と書きながら思いました。しかしですね、約束通り聖霊が与えられ、教会の誕生日とも言えるこの日。やっぱりこれはおめでとう、ですよ。

そして、本日の説教題は「教会が大切にすべきこと」とつけました。一見すると、今日の箇所には「教会」という単語はどこにも出てきませんが、この使徒の働きへとつながるイエスの最後のことばは、私たちの愛する「教会」の歩みの指針となるような箇所です。それでは、今日も共にみことばに聴いていきましょう。

### 1. 心開いて～聖書の成就～ (45-47a 節)

45 節をご覧ください。45 節は「それから」と始まります。何に対しての「それから」なのか、少し遡って見ていきます。一つ前の 23 章で、イエスは十字架につけられ、葬られ、続く 24 章は、墓に葬られたはずのイエスの遺体がなくなり、女性たちが困惑していると、「イエスはよみがえられた」と御使いは言う。それから、エマオという村に向かっていた二人の弟子のもとにイエスがあらわれた。けれども、彼らはその方がイエスとは分からないまま、聖書のことを道すがら教えられた。イエスがパンを裂いた瞬間、彼らの「目が開かれ」イエスだとわかった！するとイエスの姿は見えなくなった。二人はただちにこの出来事を 11 人の弟子とその仲間に伝えにいくと、そこによみがえられたイエスがあらわれ、教え始められた。私たちにとって馴染み深いこれらの話の流れがあって、45 節に「それから」と続くわけです。45 節。

**それからイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、**

ここで弟子たちに「イエスが」「聖書を悟らせるために彼らの心を開い」た、とあります。このことばに心をとめたいと願います。「聖書」を心から、自分のこととして理解する、悟るためには、イエスによって「心が開かれる」必要があるということです。先ほど少し出てきましたが、エマオへの途上での二人の弟子たちも 31 節で「目が開かれ」て、イエスのことが分かるようになった。

それと同じように、聖書に書かれていることを心から自分に語られていることばとして分かるようになるには、イエスによって「心が開かれ」なければならない。これは私たちにも同じことが言えます。学者のように聖書の知識が豊富になっても、それだけでは「聖書」の語る「福音」は、分からないんです。理論や知識として、理解しても、そこにはまだ大きな隔たりがある。それだけでは、この「福音」が私のために語られていることがどうしても分からないのです。つまりそれは自分の努力では、イエスによる十字架と復活を信じることはできない、ということ。イエスによって「心が開かれなければ」ならないのです。

45 節でイエスが弟子たちの心を開いて語られたことは、47 節前半までの聖書の成就について。すなわち、「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」ということ。そしてこれは旧約聖書に書かれていることの成就であると同時に、イエスが宣教中に弟子たちに語り続けたことの実現でもあります。つまり、旧約聖書における預言とイエスの公生涯において語られたことばがひとつとなり、実現、成就する。

その実現は、「その名によって」。つまり、「イエスの名によって」です。イエスの十字架と復活は「イエスの名によって」「イエスご自身によって」罪の赦しを得させる悔い改めと結びついて、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。イエスによって私たちは心を開かれ、聖書を悟ることができるようになる。その時私たちは十字架と復活の意味を知り、罪の赦しを得させる悔い改めへと導かれていくのです。2000 年以上も前のイエス・キリストの十字架と復活の出来事が、私という存在にリンクしていることを知るわけです。

このことはイエスキリストを信じる私たちも大きくうなずくことのできることでありますが、ここで聞いている弟子たちはこの事実、「イエスによって」悟るとは何か、鮮明に私たちに教えてくれています。

それはこの後に綴られる「使徒の働き」における弟子たちの歩みを見れば明らかであるわけです。イエスに心が開かれたことによって、今まで分からなかったイエスのことばが分かり、どのように歩めばいいのか悟り、そこに進む力が与えられた。

## 2. 約束されたもの～御霊の到来～ (47b-49 節)

そして続けて、イエスは弟子たちに語られます。47 節後半から 48 節

**エルサレムから開始して、あなたがたは、これらのことの証人となります。**

ここでイエスは言われます。この「十字架と復活による罪の赦しを得させる悔い改めの宣教」がこの「エルサレムから開始」するんだ！と。そして、今ここにいる「あなたがたは、これらのこと、つまり『イエスの名による福音宣教』の証人」であると言われる。心が開かれた彼らにイエスはここぞとばかりに大切なことを語られた。

ここで目を引く「証人」ということば。ここで言われているのは、裁判などで、自分が見聞きしたことをそのまま証言する「証人」というよりも、もっと積極的なイメージです。復活のイエスから「心開かれ、新しいいのちを与えられた者」として、イエスのいのちを生きて証していく。そして証人である以上、その名に相応しく生きるようにとも言われているのです。続く 49 節では、証人となる弟子たちに対してこのように語られます。

**見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。**

父なる神が約束されたもの、いと高き所から力を着せられる。これはイエスの霊である御霊のこと、つまり「聖霊」のことです。「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」この福音を信じ、その証人となる者に、いと高き所からの力、「聖霊」が与えられる、と言っているのです。そのために「エルサレムにとどまっていなさい」とイエスは言われる。

「とどまっていなさい」。このことば。この時の弟子たちにはどう聞こえたのだろうか、と考えさせられる。復活したイエスに出会い、「心が開かれ」イエスのことばを悟るようになった。恐れと悲しみ、絶望に震えたあの十字架も、初めに聞いた時にはにわかには信じられなかった復活も、ようやく意味が分かった。繋がった。エマオの途上でイエスに出会ったあの二人のように、ここに居た弟子たちの誰もが心が燃やされていたはずである。今すぐにでも、出て行って、この喜びの福音を一人でも多くの人に伝えたい、そんな衝動に駆られていたのではないのでしょうか。しかし、「とどまっていなさい」とイエスは語られた。弟子たちは、今すぐ出ていきたい思いがあったかもしれない。しかし、このイエスのことばに聞き従いエルサレムにとどまった。そして、イエスの約束通りに、イエスを信じる者たちに聖霊が与えられ、その後宣教の歩みが本格的に始まっていくのです。

## 結論 イエスの御霊によって

さて、冒頭で今日は「教会」が大切にすべきものについて共に考えたい、と言いました。ここまでの話の流れでもうお分かりかもしれませんが、教会が大切にすべきもの、それは「聖霊の働き、聖霊の力を信じる」ということです。今日の箇所のことばで言えば、イエスによって「心を開いて」いただくということ。教会は生き物です。元気があるときも、元気がないときもある。どうしてこんなことがあるのか、と悩む時もある。そんなとき、私たちはどこを見ているでしょうか。目の前の数字や意見の相違、次々と起こる問題に心は騒ぐかもしれませんが、しかし、私たちがいつでもどんなときも立つべき場所は、「聖霊の力によって教会の働きはなされていくのだ」と確信し、聖霊の力に目を向けることです。自分の理想や願い、あるいは心配が先行して、聖霊の存在を忘れかけたり、軽んじてしまうようなことはないだろうかと、私自身が改めて問われます。

確かに願った通りに教会の歩みは進んでいかない。その現実、みなさんも実体験として本当にたくさん思い出されるのではないかと思います。この軽井沢キリスト教会の歴史を見ても、喜びの歴史だけではなく、悲しい歴史がある。苦々しい思い出したくないような傷や痛みもあるかもしれません。「私をもっとこうしていれば、あの人のせいでこんなことになった」そんなふうに自分や誰かを責めたくなることもあります。また、コロナ禍を経験する中で、「どうして」「なんで」と思う時が本当にたくさんあったかと思えます。

しかし、そのような中で私たちが目を向けるべきは、いつどんな時も、教会のかしらであるイエス・キリストであり、イエスが約束通り与えてくださった御霊である聖霊が私たちを「罪の赦しを得させる悔い改め」へと導いてくださったこの事実。だからこそ、私たちはイエスの十字架と復活を信じる、というその信仰のゆえに今ここに私たちは集まっている。

今朝、今一度、私たち一人ひとりが聖霊によって集められたことを覚えて喜び、また聖霊によって自らを顧みたいのです。そして、聖霊によって新しく力を得るからこそ、私たちはこの福音を自分だけのものとせず、に宣べ伝えることができる。私個人の信仰生活も、教会としての歩みも、決して実力や経験、努力や成果によるのではない。聖霊の力に信頼して、かしらなるイエスの御声に耳を澄まして歩んでいけばいい。それは、神が私たちとどんな時でも共に居られるという確信でもあります。そしてそれは地上の生涯だけでなく、永遠に続く約束です。この素晴らしい恵みの中に入れられている喜びを受け取りながら、今週もそれぞれの場所へと遣わされていきましょう。